

單純になり過ぎ、却て誤り易くなつて來てゐる。實際、何事にしても事實の眞相は理論よりも遙かに複雑になつてゐて、綜合は分析よりも遙かに至難である事を云つておかねばならない。

分析に依り、又統計を藉りて、四大奇蹟の型に嵌つた表現を別けて見る事が出來、又、古代派の初頭に於ける其の重要な役目を明かにし、そこから此の流派に、慣習と創意と、又慣習の盲従と脱出の試みとが不思議に混り合つて、手法と題材とが發達したのを知る事も出來るのである。勿論此の理論について例外を加へようとするのではないが、直ちに次の様な結論を急ぐ事になるのを怖れる。即ち、印度の最も古い玉垣には四大奇蹟のみあつて、一切他の題材はないと速斷する事である。事實、今一度サーンチーに立還つて、例へば第二小塔を巡つて見ると、疑ふまでもなく、玉垣には、蓮が最も多く、樹、輪、塔も可なり多いのに氣が附くが、この四種を他にして、更に他の題材が圓形の彫刻の中にある。即ち、獅子、牛、象、馬、有翼獅子、孔雀、鶴、鰐、鰐、龜、魚等、數ふれば澤山であつて、其裝飾の特質が純佛教的でない